

高校生のための《本格ミステリ入門（日本編）》

執筆 大村 拓

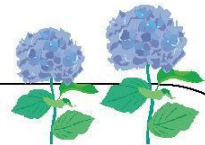
第1回「戦後探偵小説ブームの到来」

～本格探偵小説の鬼 横溝正史～

横溝正史（よこみぞ せいし 1902-1981）

それではこれより、《高校生のための本格ミステリ入門（日本編）》の講義を始めたいと思う。本稿は昨年度の《本格ミステリ入門（海外編）》で得られた知識を土台として論を進めていくので、できる限り「海外編」を読んだ上で本稿を読んでいただくことを、お勧めしたい。

第1回にあたる今回は、わが国において初めて英米の黄金期本格に匹敵しうる本格ミステリを書いた横溝正史をとりあげてみたい。一般に横溝が戦後直後の1946年（昭和21年）に発表した『本陣殺人事件』をその第一号と見るのが定説だが、それ以前にわが国に本格ミステリは存在しなかったかと問われると、そうとは言えない。そこでまず横溝を解説する前に、戦前の本格ミステリの状況を「ミニ特集」として概説しておこう。



◎ミニ特集 戦前日本の本格ミステリ

国産探偵小説（戦前では「ミステリ」は「探偵小説」とよばれるのが一般的であった）の第一号といえ、遠く明治期までさかのぼることができるが、国産の本格ミステリに限定すれば、大正期に江戸川乱歩の書いた暗号解読物の短編○「二銭銅貨」（◎『江戸川乱歩短篇集』所収 ★913ヨ 岩波書店）が第一号ということになる。乱歩は、創作（『怪人二十面相』『少年探偵団』などの少年物を含む）・評論・海外ミステリの紹介・推理文壇の育成から新人の発掘にいたるまで、わが国のミステリ界の発展に最大級の貢献をした巨人であるが、本格ミステリの創作は得意とはしなかった。実際乱歩の本格物といえば、処女作の「二銭銅貨」の他には名探偵・明智小五郎のデビュー作である○「D坂の殺人事件」、倒叙物の秀作○「心理試験」（すべて短編）くらいしか見るべきものがない。一方乱歩の代表作といわれる○「屋根裏の散歩者」、○「人間椅子」、○「鏡地獄」、○「押絵と旅する男」（以上◎『江戸川乱歩短篇集』所収）、○「パノラマ島奇談」（◎『日本探偵小説全集2』所収 ★913ニ2 東京創元社）などは、いずれも犯罪に関わる異常心理・倒錯趣味を特徴としたものである。これらは乱歩にしか書けない独自の世界をもった傑作ではあるが、論理的推理を主眼とした本格ミステリとは言い難い。ちなみに戦前では、このようなタイプの作品は「変格物」と名づけられて「本格物」と対比されて一

大ジャンルを確立しており、むしろこちらの方が戦前では主流であった。

短編においては大阪圭吉（代表作○「とむらい機関車」◎『日本探偵小説全集12』所収 ★913ニ12 東京創元社）などの本格を得意とする作家はいたが、長編における本格となると、見るべきものは少なく、海の向こうの英米では本格ミステリの黄金期が花開いていた状況を鑑みるに、いささか寂しい状況であったと言わざるをえない。それでも一応本格長編の代表作を挙げるとすると、ヴァン・ダインの影響を受けた浜尾四郎の○「殺人鬼」（◎『日本探偵小説全集5』所収 ★913ニ5 東京創元社）クロフツの影響を受けた蒼井雄の○「船富家の惨劇」（◎『日本探偵小説全集12』所収 ★913ニ12 東京創元社）、エラリー・クイーンばりに読者への挑戦状を挿入した木々高太郎の◎『人生の阿呆』（★913キ 東京創元社）あたりとなるが、いずれも本家の模倣の域を脱していない。また名作と名高い小栗虫太郎の◎『黒死館殺人事件』（★913オ1 社会思想社）は、一応本格のスタイルで書かれてはいるが、論理を超越した分類不能の異色作であり、本格物として評価するのは難しい。

以上のように戦前日本の探偵小説界は、本格ミステリという点からみると低調であったと言わざるをえず、戦後の横溝本格の登場を待つしかない状況だったのである。



【注】 1. ◎『』で表したものは、当時あるいは現在でも出版されている本の書名です。

○「」は、小説の題名です。

2. ★で表したものは、習志野高校図書館が所有している本です。NDC も表記します。

3. 小説の内容については、書体を違えています。

横溝本格の登場

わが国は1941年(昭和16年)より長く苦しい太平洋戦争（第二次世界大戦）に突入するが、この戦争こそが横溝が長編本格ミステリの傑作を次々と生み出していく母胎となった。その理由は次の3点にある。

① 戦時中は探偵小説の発行が禁止されていたこと

探偵小説は英米で生み出された文学ジャンルであるため、英米と戦っていたわが国ではこれらは「敵性文学」と見なされ、書くことが許されなくなっていた。戦前から探偵小説を書いてきた横溝にとっては、これは失業を意味し辛い状況であった。一方、わが国で探偵小説が自由に書けた時代は、雑誌連載が主たる発表媒体であったため、一般に作家たちは常に締め切りに追われて執筆をしていた。このような状況は、作品全体に首尾一貫した筋道を通し、

論理に矛盾のないようにまとめあげなければならない本格ミステリの創作にとっては、あまり好ましい状況ではなかった。優れた本格ミステリを生み出すには、やはりじっくりと構想を練り、細部まで細かい神経を使いながら書き進めていくだけの時間が必要なのである。戦前までは「変格物」が主流だったわけも、締め切りに追われる作家にとっては、着想だけで勝負のできるこちらの方が書きやすかったからに違いない。

しかし戦時中は、いくら書きたくても探偵小説は書かせてもらえないのだから、探偵小説家たちは開店休業状態となり、いやでも構想を練るだけの十分な時間が確保されたのである。横溝にとっても同様の状況であり、いつか再び探偵小説が書ける日が来ることを夢見て、構想を練っていたことであろう。この時間的余裕が戦後直後から、次々と本格長編の傑作を生み出していく原動力となったと言えよう。

②ディクソン・カーとの出会い

戦時中横溝は、友人からディクソン・カー（《本格ミステリ入門（海外編）》第4回参照）の原書を借りて読む機会があり、大いに感動したという。カーといえば不可能趣味に怪奇趣味をからませて抜群の語り口で物語を作り上げていくことを得意とする本格ミステリの大家であるが、横溝はこのスタイルこそが自らが手本とするべきものと直感したらしい。怪奇趣味だけなら「変格物」が主流であった戦前でもおなじみのものであったが、これをカーのように知的な論理と融合させて書くという発想は誰にもなかった。横溝はカーを読んだ時、これこそが自分が目指すべき方向だと感じたのだろう。それはカーの語り口の巧さと同様の資質を自らに見出したからに他ならない。横溝が戦前に書いていた探偵小説は、緻密な論理に支えられた本格物ではなかったが、語り口の巧さにおいてはカーにひけをとらないほどの抜群のものがあつた。この共通点を発見したことこそが、戦後の作風を一新させる原点となったのである。

③岡山への疎開

戦時中横溝は空襲を逃れて岡山の山村に疎開することとなったが、この経験が横溝ミステリに欠かせない舞台を用意することとなった。戦後の横溝ミステリでは、古い因習と封建的な人間関係にいろどられた農村が舞台となることが定番となっているが、横溝自身は実は神戸生まれで学校は大阪、編集者となってからも東京暮らしと、典型的な都会人なのである。彼が田舎に暮らしたのは、長野の諏訪で療養生活をした一時期を除いては、疎開時に岡山に暮らしたのが初めてであった。この田舎での暮らしは、都会人横溝にとっては、何かと刺激的なものであったようだが、同時にディクソン・カーが得意とするイギリスの伝奇趣味をわが国に取り入れるならこの農村の生活こそがふさわしいと、作家として直感したのだろう。カーが描くところの悪魔や降霊術といったキリスト教文化に根ざした習俗を、先祖の崇りやわらべ唄といった純和風のものに変換することで、横溝ミステリの必須要素が準備されたのだ。

以上のような戦時中を体験した横溝は、敗戦の玉音放送を、「これからは、探偵小説が書ける！」という高揚感とともに聞いたという。そして満を持して本格ミステリの傑作群を次々と発表していくのだ。

以下に横溝の代表作5作を挙げてみるが、これらはいずれも終戦後の昭和20年代に書かれたものなのである。

1. ◎『本陣殺人事件』（★913ヨ 角川書店）（1946年＝昭和21年）

【内容】江戸時代からの宿場本陣の旧家、一柳家。その当主の婚礼の夜、屋敷内にただならぬ悲鳴と、激しい琴の音が響き渡った。離れ座敷では夫婦が布団の上で血まみれになって惨殺されていた。庭の中央には血に染まった日本刀が突き刺さっており、周囲には足跡一つ残っていなかった。また、3本指の人間が犯人であると思わせる、手の血痕が残っていた。にもかかわらず、周りに降り積もった雪のために、離れは完璧な密室と化しており、そこには犯人の逃げた痕跡が一切なかったのだ！



本作は日本の本格ミステリが初めて世界標準となった記念碑的作品である。密室殺人や謎の三本指の男の存在が醸し出す怪奇趣味は、明らかにディクソン・カーの影響を強く感じさせている。しかしこれらの設定を表面的に扱うだけなら、戦前のミステリにもいくらでもあった。本作を世界標準としているのは、その謎解きの論理の確かさや伏線の巧みさといった本格ミステリとしてのテクニックが、従来の日本ミステリとは一線を画している点である。またその密室の建物にしても、外国ミステリをそのまま移植したかのような不似合な洋館などではなく、純和風建築である。舞台も岡山の旧家、さらには琴や日本刀といった和風の小道具で構成される謎は、海外作品の模倣ではなく、日本初の純本格ミステリを書こうという横溝の志の高さを伝えるものである。ただ残念なのは、通常の長編小説の半分程度という分量の少なさで、物語があっけなく終わってしまう点だ。これは終戦直後の物資不足の影響で、満足に紙を確保できなかったためである。横溝作品は分量を増やして書き込めば書き込むほど、天性の語り口の巧さが発揮されて面白くなる傾向がある。今の倍くらいの分量にしていれば、さらなる傑作になったに違いない。

そして本作でデビューするのが、名探偵金田一耕助である。この後のほとんどの横溝作品で活躍する金田一は、日本を代表する名探偵である。もじやもじや頭に小柄な体格、よれよれの着物に袴姿という名探偵の外見は、決してカッコいいとは言い難い。その性格も、一見愛想が良く人なつっこい善人のようでいながら、実のところ飄々としてつかみどころがない。またその推理力も、「神の如き英知」とか「カミソリのような頭脳」といった名探偵におなじみの形容とは無縁で、どこか頼りなげで危なっかしい感じだ。しかしその探偵としての能力は、犯人に翻弄されているように見えながら、肝腎の点はだまされることなく見抜き、最後にはちゃんと解決してしまうのだから、やはり名探偵としか言いようがない。このように個性的な名探偵を創出したことで、横溝ミステリは一層輝きを増したのである。

ところで近年金田一耕助の孫と称する少年がコミックで活躍しているようだが、実際には金田一は結婚をしておらず、子孫がいるはずがない。あえて言えば、アメリカ放浪中に隠し子がいた可能性がなくもないのだが…。

2. ◎『蝶々殺人事件』（★913ヨ 角川書店）（1946年＝昭和21年）



【内容】人気歌手・原さくら主演のオペラ「蝶々夫人」が公演された。大当たりをとった東京公演の後、大阪へとその場を移す事となり、その間さくらは一足先に大阪に乗り込んだが、何故か宿泊先のホテルから失踪してしまう。いくら探し回っても見つからず、一座は主演を欠いたまま当日を迎える事となった。そしていよいよ公演直前、さくらはなんと死体となり、楽団員の荷物であるコントラバスのケースに詰められて到着したのである。一体、誰がこんなことを？ そしてこの荷物はどこから届いたのだろうか？警察は東京と大阪の間を渡ったケースの動きを追う事になるが…。

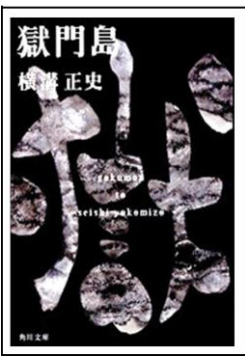
本作は、横溝が終戦直後に『本陣殺人事件』と同時並行で雑誌に連載した作品である。代表作を2作も同時に発表するとは、戦時中に行き場を失っていた著者の創作エネルギーが、いかに強

いものであったかがい知ることができよう。

本作には『本陣殺人事件』とは違って、ディクソン・カーの影響は見られず、死体をコントラバスのケースに入れて移動させる謎の設定などに、クロフツの『樽』（《本格ミステリ入門（海外編）》第5回参照）の影響を感じさせる。また舞台は東京と大阪という大都会で、日本の農村社会を舞台とした戦後横溝作品の特徴はなく、むしろ戦前に得意とした都会型スリラーの雰囲気がある。しかし死体移動のトリックを始め、独創的なアリバイ・トリック、意外な犯人と本格ミステリとしての出来も群を抜いているのである。一部には本作の方が『本陣殺人事件』よりも上と評価する向きもあるくらいだ。

さて本作で活躍する名探偵は、戦前の横溝ミステリに数多く登場したシリーズ探偵の由利鱗太郎である。彼は元刑事の探偵で、新聞記者の三津木俊介とコンビを組んで数多くの事件を解決に導いてきた。しかしその特徴は若白髪であるという点くらいしかなく、個性や魅力においては、金田一耕助には大きくひけをとっている。そのため同時連載された『本陣殺人事件』でデビューした金田一が人気をさらっていくのと対照的に、影が薄くなった由利は戦後初登場となった本作以降出番を失い、これが最後の作品となってしまったのである。

3. ◎『獄門島』（★913ヨ 角川書店）（1948年＝昭和23年）

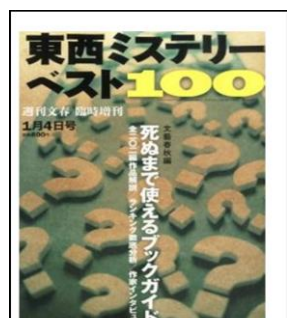


〔内容〕 獄門島。それは江戸時代を通じて流刑の地とされてきた、瀬戸内海に浮かぶ封建的な因習の残る小島であった。この島へ金田一耕助が渡ったのは、復員船の中で死んだ戦友・鬼頭千万太に「俺が生きて帰らなければ、3人の妹達が殺される…」との遺言を託されたためであった。島の漁師の元締めである鬼頭家は、本家と分家に分かれ対立しており、またその三姉妹は、美しいがどこか尋常でない雰囲気を醸し出していた。そしてその後、遺言通りに凄惨な連続殺人事件が発生する。それは島の寺に記されていた芭蕉の俳句に見立てたものであった！

週刊文春はこれまで2度（1985年と2012年）、すべての時代にわたるミステリのベスト100を選出する「東西ミステリーベスト100」という企画を行ったことがある。そしてわが国のそうそうたるミステリ・マニアたちが投票した結果、2度とも国内ミステリのベスト・ワンに選ばれたのが本作なのである。四半世紀の時を隔てて変わることなく1位に君臨し続けたことは大変な偉業で、まさに本作こそがこれまで日本語で書かれたすべてのミステリの中で、最も面白い本であると評価されたと考えて差し支えないだろう。



1986年版
★901ブ（文藝春秋）

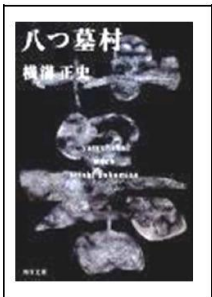


2013年版
★901ブン（文藝春秋）

本作は戦後横溝が発表した金田一耕助物の第二弾で、紙事情もだいぶ落ち着いてきたのか、分量も通常の長編小説並に増えてきている。そのため、著者天性の語り口の巧さがさえわたり、『本陣殺人事件』で感じさせた物足りなさはもう見てとれない。舞台は瀬戸内海に浮かぶ獄門島という島で、典型的な日本の農村文化、因習的な精神風土の中で物語が進行していく。まさに横溝ワールド全開である。最初の死体は梅の木に逆さ吊りにされ、二度目の死体は釣り鐘の中に閉じ込められて発見される。これは俳句の字句通りに三姉妹が殺されていくという見立て殺人の趣向なのだが、殺人の恐怖と純和風の絵柄の美しさの同居が、絵画のような強烈な印象を読者の脳裏に刻み込む。さらに最後にさまざまな伏線が収束していく解決部は意外性と論理性に充ち満ち

ており、ミステリの醍醐味を満喫できること間違いない。日本一どころか、世界のどこに出しても恥ずかしくない傑作である。

4. ◎『八つ墓村』（★913ヨ 角川書店）（1951年＝昭和26年）



〔内容〕 戦国の頃、三千両の黄金を携えた8人の武者がこの村に落ちのびた。だが、欲に目の眩んだ村人たちは8人を惨殺。その後、不祥の怪異が相次ぎ、以来この村は「八つ墓村」と呼ばれるようになったという…。次いで大正×年、落人襲撃の首謀者田治見庄左衛門の子孫、要蔵が突然発狂、三十二人の村人を虐殺し、行方不明となる。そして二十数年、要蔵の息子の帰村をきっかけとして謎の連続殺人事件が再びこの村を襲った…。

舞台は岡山県の山中にある典型的な日本型農村の八つ墓村。ここでは村人による無差別大量殺人といういまわしい過去があり、それは惨殺された落ち武者の祟りだとされてきた。そして今また祟りのせいだと思われるような連続殺人劇の幕が切って落とされるのだ。

本作は横溝作品の中でもホラー色が一際濃い作品で、ディクソン・カーの伝奇趣味を見事に日本風に移植した作品であると言えよう。一方、物語としては抜群に面白いのに比して、推理部分にはいささかも足りないところがある。実際、本作における金田一は、次々と連続殺人が進行していく中、一向に真相を見抜けぬ無能ぶりを露呈し、犯人に翻弄され続ける。後に読者たちから「金田一は防御率が悪い」という悪口を言われる原因ともなった。

さて、本作の主人公辰弥は、神戸で会社勤めをしているごく普通の青年であったのだが、ある日突然実父の親戚から八つ墓村に来るよう要請される。辰弥は記憶にないような幼い頃は八つ墓村に住んでいたことがあるが、その後は神戸で暮らしてきた典型的な都会人である。そんな辰弥が八つ墓村で目にする田舎の風習は、何もかもが奇異に映るものばかりであったのだ。農村という異世界に紛れ込んだ一人の異邦人。これは主人公の立場であると同時に、現在都会に暮らす多くの読者の立場でもあろう。したがって読者は自然と主人公に感情移入することになり、主人公が段々とその異世界を受け入れていくように、読者もそれを受け入れていくことになるのである。それは一度も田舎で暮らした経験のない人にも、どこか懐かしさを感じさせるような日本人の原体験のようなものである。このような読書体験ができるところに、横溝ミステリを読むもう一つの楽しさがあると言えよう。以上のように本作は、都会人がすんなりと農村という異世界に入っていくように設計されているので、横溝ミステリの入門書として最適である。横溝未体験者の方は、まずは本作から読み始めてみることを強くお勧めしたい。



◎『犬神家の一族』（★913ヨ 角川書店）（1951年＝昭和26年）

〔内容〕 真宗財界の大物・犬神佐兵衛が莫大な遺産を残してこの世を去った。佐兵衛にはそれぞれ母親の違う娘が3人いたが、彼女たちにはそれぞれ佐清・佐武・佐智という息子がおり、息子に遺産を継がせることばかり気にしていた。そんな中、佐兵衛の遺言状は弁護士によって金田一耕助の立ち会いのもと公開されるが、その内容は「相続権を示す三つの家宝を恩人の孫娘野々宮珠世に与え、遺産は珠世が佐清・佐武・佐智の3人の中から婿に選んだ者に与える」という相続争いに拍車をかけるようなものであった。

遺産相続のため信州の田舎に復員してきた男は、戦災で顔をひどく負傷し白いゴムの仮面をかぶっていた。彼ははたして本物か、それとも偽物がなりすましたものか。このような興味深い謎で幕を開ける物語は、例のごとく一族内の連続殺人劇に発展していく。古い価値観と血のつなが

りにまつわるどろどろしたドラマは、いつもの横溝ワールドである。

さて本作は、一般読者層からは横溝の代表作だと思われるようだ。本作も確かに横溝らしく面白い作品であるが、歴史に残る名作『獄門島』をさしおいて代表作と見なされるのはおかしくはないだろうか。その理由を探るには横溝作品の映画化について触れなければならない。

1976年(昭和51年)角川書店は、小説と映画をタイアップさせるという画期的な商法を創始したのだが、その第一号となったのが本作であった。市川崑監督で石坂浩二が金田一耕助役を務めた映画版『犬神家の一族』は、原作のもつ絵画的な特徴を余すことなく表現し、興行的にも大成功を収め、多くの一般大衆に強烈な印象を残すこととなる。特に白い仮面をかぶった復員兵の不気味な顔や、池から突き出した死体の二本足のシュールな映像などは、見る者にとってのトラウマになるほどで、横溝作品の印象を決定づけたといつてよい。そしてそれに並行して小説の方も皆ベストセラーとなり、いわゆる「横溝正史ブーム」が現出するのだ。発表されてから20年以上たった小説が、ベストセラーとなるなど空前絶後のことである。このように本作は「横溝正史ブーム」の象徴ともいえる作品となり、そのことから今でも横溝正史といえば「犬神家」を連想する人が多いのである。しかし映画版を見ただけで横溝の魅力をすべて理解したとは決して思わないでいただきたい。横溝の魅力の原点はあくまでも小説にある。映画版しか知らない人も是非原作を読んでいただきたい。さすれば横溝の巧妙な語り口にあつという間に引き込まれ、映画よりも小説の方が何倍も面白いことを、きっと理解していただけることであろう。

私の一押し!!

それではこのコーナーでは、《本格ミステリ入門(海外編)》に引き続いて、一般的評価とは関係なく、私が個人的に偏愛する作品を紹介していきたい。

◎『白と黒』(★913ヨ 角川書店)(1961年=昭和36年)



【内容】 平和そのものに見えた団地内に、突如匿名の怪文書が横行。Ladies and Gentlemenという書き出しで始まるその文書は活字を切り貼りして作られており、住民たちのプライバシーを暴露するものであった。その矢先、団地のダスト・シュートから、真黒なタールにまみれた女の死体が発見された。眼前で起きた恐ろしい殺人に団地の人々の恐怖は頂点に達する…。謎の言葉「白と黒」とは何を意味するのか？ 団地という現代都市生活特有の複雑な人間感情の軋轢と、葛藤から生じる事件に金田一耕助が挑戦する。

本作は横溝がスランプに陥っていた頃に書かれた作品である。昭和20年代には農村を舞台とした本格ミステリの傑作を続々と世に出してきた横溝であったが、昭和30年代になると壁に突き当たる。それはこの頃、ミステリ界がいわゆる「社会派ブーム」といわれる時代となり、現実根ざしたリアルな小説のみが価値があると見なされ、逆に非現実的な殺人事件や名探偵の活躍を扱った本格ミステリは、幼稚で価値の低いものと見なされてしまったためである。横溝の作品などはまさに後者の典型のようなものであったため、書きづらくなってしまったのだ。特に農村を舞台とすることは、都市に集中しはじめた高度成長期の日本人に現実感を抱かせることを難しくしていたのであろう。そんな中、横溝も何とか時代のニーズに応えるべく、作風を変えようと努力はしている。金田一には、東京に事務所を構えさせ、リアルな都市型犯罪を扱わせようとしたのも、その表れである。しかしこんな話では横溝の長所は殺されてしまう。その結果この時期の作品は駄作ばかりが目立つようになり、この後ついに執筆そのものも中断してしまうのである。本書はそんな中では、珍しく出来の良い作品となっている。

横溝ミステリは、何と言っても農村という固定された社会における複雑な人間関係から生じる謎を描いてこそ輝くのである。その農村を舞台とすることができないのなら、いっそ都市の団地を舞台としたらどうか。そんな思い切った試みが見事に功を奏したのが本作である。一見都市の団地住民は互に関心を持たないバラバラの存在のように見えながら、実は農村と変わらないよ

うな緊密なつながりがあった。少なくとも昭和30年代の団地ではそうであった。それはあくまで「団地」であって、その後互いの関心すらなくしてしまう「マンション」とは似て非なるものなのだ。ならば団地を舞台にしても、農村を舞台にしたのと同じような物語が書けるではないか！本書を読むと、都会を舞台としているのになぜかあの農村ミステリのような香りがするのは、そのようなわけなのである。

それでは最後にこれまで紹介しきれなかった、代表作をもう5作紹介して、本稿第1回を閉じたいと思う。

1. ◎『**悪魔の手毬唄**』（★913ヨ 角川書店）（1959年＝昭和34年）
～岡山鬼首村でおこった童謡見立て連続殺人。横溝の代表傑作。
2. ◎『**夜歩く**』（★913ヨ 角川書店）（1949年＝昭和24年）
～旋破りの大トリック。一見地味ながらマニアの評価が高い。
3. ◎『**女王蜂**』（★913ヨ 角川書店）（1952年＝昭和27年）
～戦前の都会スリラーと戦後の農村本格の両方が味わえる。抜群の面白さ。
4. ◎『**悪魔が来りて笛を吹く**』（★913ヨ 角川書店）（1953年＝昭和28年）
～死を呼ぶフルートは悪魔の調べ。舞台は東京だが横溝らしさがあふれる。
5. ◎『**仮面舞踏会**』（★913ヨ 角川書店）（1974年＝昭和49年）
～軽井沢を舞台にした、おなじみの血縁ドロドロの話。晩年の秀作。



2013.7.10 更新